スペインの民主化プロセス：フアン・カルロス国王と対米関係（1969–1977 年）

細　田　晴　子

I. はじめに

1939 年フランコ（Francisco Franco）は、スペイン内戦において勝利し、限定的な政治的多元性を伴う権威主義体制を確立した。1969 年フランコの後継者として指名されたフアン・カルロス皇太子は、フランコの死後 1975 年 11 月フアン・カルロス一世として即位し（Juan Carlos I：以下、即位以降を国王と表記）、自らを「全てのスペイン人の国王」と宣言した。こうしてスペインの民主化が開始され、1977 年には総選挙が行われ、翌年には国民投票で憲法が承認されて国王の地位が明記された。

本稿では、1969～1977 年の期間、フアン・カルロス皇太子（国王）がいかに米西関係に関与したかについて史的分析を行う。従来、スペインの民主化プロセスにおける皇太子（国王）の行動については、国内政治的観点からさまざまな分析が行われ、その貢献には総じて高い評価が与えられてきた（例えば Preston 2003）。一方で、皇太子（国王）が民主化プロセスにおいて外交面で果たした役割に関する研究、特に米国と

の関係に関する研究は僅かである（Powell 2007; Lemus 2005）。筆者は西外交史の中の米西関係を米の視点からも眺めることによって、この「欠落」を補うことを目指している[1)]。

冷戦構造の中で東側ブロックに対抗するために、米国は反共主義を標榜するフランコ・スペインを西側陣営に組み入れた。一方欧州諸国はEECなどの欧州諸機関へのフランコ・スペインの参加を拒否し、1970年代には各政党の財団、労働組合、社会主義インターナショナルを通じスペインの非合法政党を支持し、民主化を支援した。1975年9月のフランコ政権による死刑執行に対し、欧州諸国は駐スペイン大使を召還し、民主化を見越して冷徹な観察者に徹したが、米国は当時のフランコ政権に対し好意的であった唯一の大国であった。本稿では、この米西関係に焦点を絞り考察する。その際スペイン側の史料のみならず、米国史料を参照することにより、双方のプレーヤーの視点からの分析を行う。

フアン・カルロス皇太子（国王）を中心に据えた民主化プロセスにおける米西関係には、皇太子の役割に懐疑的な米側と米国からの信頼を獲得しようとする皇太子の努力を特徴とする第一期（1969〜1974年）と、米国が皇太子（国王）を通じて安定的な民主主義国家を欧州の西端に構築しようと積極的な支援を行う第二期（1975〜1976年）に大別される。本稿では、この一期から二期への移行はどのような要因で生じたのか、また、それにはどのような背景があったのかについて考察する。最後に第二期後、1977年スペインの総選挙に至るまでの課題について述べる。

II：第一期：フランコの後継者、フアン・カルロス皇太子（1969～1974 年）

枢軸国側に近い立場を取ったフランコ政権は、第二次世界大戦後国連の排斥決議を受け、マーシャルプランの適用外となって国際的に孤立し、1950 年代まではアウタルキーア政策[2)] を実施していた。しかし冷戦の進展に伴い、中東に対する軍事拠点を必要としていた米国は、相互防衛・経済援助・基地貸与協定（以下米西協定）を 1953 年に締結した。テクノクラートが主導したフランコ政権は、以後国際通貨基金、世界銀行加盟を成し遂げ国際経済体制に組み込まれ、1960 年代は年率 7% の経済成長を達成した。フランコの後継体制に関しては、1966 年国家元首と首相を分離する国家組織法（Ley Orgánica del Estado）が制定され、1969 年国家元首の後継者としてフアン・カルロス皇太子が指名された。

皇太子は陸海空軍それぞれの士官学校で教育を受け、軍事指導者としての資質はこの時期に磨かれた。政党は唯一ファランヘ党のみであるが、限定的な多元性を容認するフランコ政権内にあって、皇太子は「王制派にとっては完全な忠誠の対象であり、ファランヘ党にとってはフランコの合法的な継承者であり、軍部にとっては三軍の統帥権を掌握する最高指揮官」（若松　1984：59）であった。フランコ死後二番目の外相となるオレッハ（Marcelino Oreja, 1976～1980 年）は、「系統立った軍事教育を受けた」皇太子の気質は「文民より軍人に近い」と評した[3)]。

フランコの後継者が指名される以前、米国はフアン・カルロス皇太子およびその父のバルセロナ伯爵（Don Juan, Conde de Barcelona）のい

ずれに対しても明確な支持は行わなかった。アイゼンハワー（Dwight Eisenhower）共和党政権（1953～1961 年）下では、両者は「スペインの皇太子方」として同等に扱われた（Areilza 1984:121）。一方、民主党のケネディ（John F. Kennedy）大統領（1961～1963 年）は、同年代のフアン・カルロス皇太子を 1962 年の訪米時に別荘へ招待したのに対し、1967 年ジョンソン（Lyndon Johnson）大統領（1963～1969 年）期の訪米時には、大統領本人ではなく夫人が皇太子夫妻を接待した。しかし 1967 年の訪米時でさえも、「皇太子が米国の政界・官僚らと接触する機会を得て意義があった」と当時の駐米スペイン大使は評価している[4)]。フアン・カルロス皇太子は、ポスト・フランコ時代の米西関係を視野に入れ、米政権に冷遇されていた皇太子時代から野党議員もふくめ各界の人々と接触していたのである。

ニクソン（Richard Nixon）大統領（1969～1974 年）は、公私にわたる訪西を通じフランコ政権に親近感を有していた。ニクソン政権にとり、対スペイン政策中の最優先事項はスペイン基地の使用権維持であったため、ポスト・フランコ時代に反米的な政権が樹立する前に NATO に加盟させ基地へのアクセスを確実にしようとした。しかしながら欧州諸国は、フランコ政権の「非民主性」を理由にスペインの加盟を拒否し続けた。

1970 年代前半の国務省は「ヘミングウェイの小説から出てきたような」社会・経済的に立ち遅れたスペインという先入観を有していた（Ortí 2005:195–198）。実際米国の駐スペイン大使は、職業外交官ではなく外交経験のない政治任命による起用が殆ど（1951 年以来、10 名の駐スペイン大使のうち職業外交官は僅か 2 名）であった。つまり、米国の

対外政策全体から俯瞰すると米西関係は喫緊の外交案件ではなかったのである。

またニクソン政権下のロジャーズ（William Rogers）国務長官在任時（1969～1973 年）の国務省は、皇太子の能力を軽視していた。1971 年の訪米時など、皇太子は外相に遮られ、内容のある発言を殆ど行わなかったためである[5)]。ただし米国のマスコミは、若い世代の皇太子夫妻の訪問を好意的に報じていた。一方、キッシンジャー（Henry Kissinger 1969～1975 年大統領補佐官、1973～1977 年国務長官）は、通常の外交ルートを経由せず、大統領府の権限でウォルターズ（Vernon Walters）将軍（1972～1976 年　CIA 副長官）をフランコのもとへ派遣し、国務省とは別途スペイン国内の情報を入手していた[6)]。

続くフォード（Gerald Ford）政権（1974 年 8 月～1977 年 1 月）期には、米政府はポスト・フランコ時代への懸念を抱きつつも、やはり最大の関心事は、民主的政権の樹立ではなく、スペインの基地の使用権が保証されるよう欧州の枠組み特に NATO へスペインを組み入れることであった。同政権下、外交政策において主導権を握ったキッシンジャーは、非合法であるが当時スペインで組織力のあった社会労働党（PSOE）や共産党（PCE）を通じた民主化基盤の形成に対する積極的援助には反対であった。こうした左派の反体制派は、軍事・経済援助をフランコ政権に与えた米国を敵視し、反米・反駐留米軍・反 NATO 加盟感情を有しており、米国は自らの利益遵守のためフランコ政権を支持せざるを得なかった。

III：第二期（1975～1976 年）：米国の政策転換期

(1) スタブラー大使の着任

当時キッシンジャー国務長官とキプロス紛争に関して共に交渉に当たり、信頼を得ていたスタブラー（Wells Stabler）欧州局次長は、キッシンジャーの推薦で 1975 年 2 月駐スペイン大使として着任した。スタブラーは中南米育ちでスペイン語に堪能であり、二度にわたる在イタリア大使館勤務、国務省の欧州関連部署勤務といった経験から、欧州政治にも精通した職業外交官であった。また、国務長官のキッシンジャーおよび直属の上司であった欧州局長とスムーズな人間関係が構築されており、更にマックロスキー（Robert McCloskey）基地交渉担当大使とも知己であった。在スペイン米国大使館からは、一般に民主党色の強い国務省の官僚に不信感を抱くキッシンジャーに対しても、スムーズな意見具申が可能であった。

スタブラー大使は国務省から対スペイン政策の具体的な指示を得ぬまま、スペインに着任した。しかし彼は既得の欧州政治の知識から、スペインのスムーズな民主化移行を望んでいた。国際訪問プログラムによりジャーナリストのみならず PSOE の若手党員や労働組合関係者などの米国招聘を計画し[7)]、フランコ政権内の人脈作りは勿論、PSOE や PCE も含めた反体制派の人脈をも構築したのである。また、イタリア勤務時代、亡命中のコンスタンティン（Constantine II）前ギリシャ国王（フアン・カルロス皇太子の岳父）とは知己であり、スペインでも幾度か会見していた。こうした背景もあり、皇太子からの信頼を得た大使は、フランコの容態も含め内政・外交に関する詳細な情報を国務省へ逐

次報告していた[8]。これらの点は、スペインの民主化過程における友好的な米西関係構築にプラスの材料となる。

(2) フォード大統領の訪西と政策転換

米国はスペインのNATO加盟を引き続き主張するも、いまだに欧州諸国からは賛同を得られずにいた。フォード大統領は、1975年5月のNATO首脳会議において欧州安全保障におけるスペインの貢献を他の加盟国に認めさせ、その文言を最終宣言に追加しようと試みたが、それも失敗に帰した。その直後、硬直状態である米西協定改定交渉の有利な進展を目指し、フォード大統領はスペインを訪問した。

スペインおよび米国の世論は、それぞれ異なる側面から同訪問の意義を疑問視していた。スペイン側は、大統領がスペインの「貢献」を欧州諸国に承認させられず訪西したことを批判した。米国側は、同訪問は「瀕死のフランコ政権に対する米国の支援」を意味するとして否定的な報道を行った。一方、スタブラー大使は体制内の非主流派と大統領との会見設定を試みるも、この提案はスペイン側に却下された。こうして米国はスペインの将来の政権を担う可能性のある人々との良好な関係構築の好機を失ったのである[9]。しかしスタブラー大使の内政報告、具体的な政策提言は、スムーズなスペインの民主化に資したという点で評価出来る[10]。

大統領訪西で米国が得たものがあるとすれば、皇太子と米国政府の関係緊密化である。皇太子はスペインの現状と変革に関する自らの意見を表明すべく、公式会見の他に、スペイン側の首相・外相・通訳の同席しない英語による大統領との非公式会合設定を、スタブラー大使を通じ米

側に要請したのである。最終的に米国大使館は、フォード大統領と皇太子のみの非公式会合を設定した。皇太子は大統領に好印象を与え、大統領・キッシンジャーは、それまでの皇太子に対する「好人物だがトップとしては頼りない」という偏見を改め始めた[11)]。

更にスタブラー大使は、民主化を推進する皇太子への米国側の支援を明示するため、フォード大統領の訪西直後に皇太子の米国公式訪問を迅速に実現すべきとし、当初アポロ・ソユーズ（ドッキング計画）の打ち上げにあわせた7月と具体的に提言したのである。しかし、米西協定の延長交渉の行き詰まり、フランコの病状悪化・死去といった理由により、訪米は1976年の米国建国200年記念式典まで延期された[12)]。

1975年11月フランコ死去の直前、スペイン領西サハラの領有権を主張するモロッコが非武装デモ「緑の行進」を行うという危機的状況の際、皇太子は特使として友人のマヌエル・デ・プラド（Manuel de Prado）を米および仏へ派遣した。米においては、彼はスコウクロフト（Brent Scowcroft）大統領補佐官と会談した[13)]。キッシンジャー国務長官から皇太子へのメッセージは、スペイン軍を指揮下に置くこと、リスクは伴うが合法性の得られる国民投票の即時実施、共産党の非合法化維持、社会党ではなく中道派による政権樹立であった[14)]。皇太子自身は西サハラ現地へ向かい、新しいリーダーとしてスペイン軍部のみならずスペイン世論の支持も得ることとなった。

スタブラー大使による詳細なスペイン内政報告・政策提言を通じ、皇太子の政治能力が明確になるなどし、フランコの死の直前、ようやくワシントン側もフランコ政権との絆に限らぬスペインに対する幅広い影響

力維持の必要性を認識し、皇太子支援による穏健改革派政府の樹立を支持し始めた[15]。米国は、フランコ政権擁護を意味するフランコの葬儀への出席ではなく、戴冠式にフォード大統領自身が出席することによる新国王への支持表明まで計画していたのである[16]。ただし最終的には、大統領の日程の都合で、ロックフェラー副大統領が葬儀および戴冠式へ出席することとなった[17]。

(3) 米国の国王支援

フランコの死後、米国側から国王に対する具体的な「支援」が開始された。第一に、議会の承認を得ぬ行政協定であった米西協定を、条約として批准した。当初米西協定の改定交渉にあたり、米国大統領府は条約ではなく行政協定としての改定を望んでいた。最終的には、マックロスキー協定交渉担当大使の進言もあり、キッシンジャーは 1975 年末には交渉プロセスを加速し、条約として議会に提出することを決定した[18]。こうしてフランコ逝去二ヵ月後の 1976 年 1 月、両国は米西友好協力条約に署名したのである。

次なるステップは、米国議会での同意を得ることであった。米国では 1969 年以来共和党政権であったが、1970 年代上院の多数派は民主党であった。議会の多数派政党から外交委員長が選出されるため、皇太子は外交に対する野党の影響力も看過出来なかった。非民主的政権支援を意味し議会の未承認の行政協定に対し、米国議会では反発があり、条約にすべきとの議論が 1960 年代より存在した。

署名された米西友好協力条約発効のためには、上院の助言と出席議員の三分の二以上の同意が必要であった。この手続きをスムーズにするた

め、国王は米国議員と会見し、スペインの民主化進捗状況をアピールした。それは例えば民主党のペル（Claiborne Pell）上院議員、リベラルなジャビッツ（Jacob Javits）共和党議員、アルバート（Carl Albert）民主党議員らのスペイン訪問時に行われ、彼らは議会においてスペインの民主化支持をアピールした[19)]。国王は、スペイン民主化に対する米国支援の取り付けには、米国上院外交委員会の支援が不可欠であることを十分認識していたのである[20)]。

その中でも特に上院での同意確保には、ペル議員が重要な役割を果たした。フランコ政権下のスペインで二度ほど拘束された経験のある同議員は、1976年2月、約30年ぶりにスペインを訪問し、国王および当時未だ非合法であった政党の指導者らと会見し、民主化過程のスペインに好印象を抱き、条約を支持すべきという結論に達した。また、国王が僅か二ヶ月で成し遂げた成果を評価し、スペインの民主化を支援する条約が米国議会で否決されれば、スペインにおける民主化の動きは停滞し、国王の影響力も減退すると考えた。同議員は、国王らが推進する民主化プロセスを支持すべきとして、スペインの内情を詳細に報告し[21)]、上院議員に条約批准を説得したのである。

第二に、米国報道機関側からのサポートである。1976年6月の訪米直前、国王はフランコ政権時代から引き続き首相を務めるアリアス（Carlos Arias Navarro）首相（1974～1976年）への不満を、ニューズ・ウィーク誌の記者へのインタビューで明らかにした。また、ジャーナリスト（ヨーロッパ・プレス）のアルメロ（José Mario Armero）は、米国公式訪問の際の資金援助を米国報道機関へ求めた。CIAは、「国王は、訪米によりリーダーとしての地位を固め、自由化への努力をアピールし、

国際世論におけるイメージ向上を望んでいる」と分析した[22]。国王は訪米中報道関係者を招待した朝食会を開催し、ニューヨーク・タイムズ紙は好意的な論説を掲載した。国王は、スペイン駐在の特派員がフランコ時代の偏見から脱し、現在のスペイン情勢を正しく報道することを望んでいた[23]。

第三に、1976 年 6 月に実施された国王の公式訪問である。駐米大使の経験も有するアレイルサ（José María de Areilza）外相は、訪米中に上下両院合同本会議における英語のスピーチを提案した。国王に添削の依頼を受けたスタブラー大使は、二国間関係の歴史および現代スペインについて述べるスピーチ原案に関し、歴史に言及した前半部分を削り、冒頭に二部構成である旨明言するよう助言した。前半が冗長であれば、表層的なスピーチとみなされる可能性があるためである[24]。こうして英語で行われた国王のスピーチは、米国内で好意的に報じられ、米国議員にも好印象を与え、米西条約は 6 月 21 日に上院の同意を得た。

さらに、大統領府も具体的な行動で国王支援を表明した。まず、大統領による二度の晩餐会出席である。通常米国大統領は一人の国賓につき晩餐会に二度出席することは稀であるが、今回は国王による民主化支持を明確にするため、晩餐会を主催する他スペイン側の返礼晩餐へも出席した。後者には大統領のみならず、ロックフェラー副大統領、キッシンジャー国務長官の他、国防長官ら閣僚も同席した[25]。米国ではフランコ時代はスペインに対して批判的な意見がみられていたが、キッシンジャーは今回の国王の訪問が米国のあらゆる場所で好印象を与えていると評価した[26]。

(4) 国王の政治能力

フランコ政権時代、皇太子はスペイン内政に関する発言が制限されており、それを文面通りに受け取っていた国務省は皇太子の実務能力・リーダーシップを過小評価していた。しかし、皇太子（国王）は政治的な会談を行う能力を有していたのである。また皇太子（国王）は、世論に支持された外交政策の必要性および内戦で二つに分裂したスペインの和解という王室の役割を意識し、米国との良好な関係を保持する重要性を認識しつつ、選挙に縛られない自らの地位を利用し、米側からの支援の必要性を訴えていた。

内政に関して一例をあげると、皇太子は既に 1971 年からイタリア在住の従兄を通じてアメリカ労働総同盟・産業別組合会議（AFL-CIO）の幹部との接触を試みていた[27)]。1976 年 6 月の訪米時には会長のミーニー（George Meany）とも会見した[28)]。スタブラー大使も、会見に合わせスペイン政府の労働組合に対する姿勢に関し電報を米国へ送付している[29)]。同会見で国王は「労働組合運動で PCE が主導権を握る懸念」をミーニーに表明した。加えてキッシンジャーもミーニーに対し、スペインにおける「民主的」労働運動の支援を依頼した[30)]。AFL-CIO による具体的な支援内容は不明だが、同年 11 月に政治改革法がスペインの国会で承認されるとミーニーは国王に祝辞を送っている[31)]。つまり国王は総選挙を念頭に立憲君主制を擁立すべく、米国各方面と折衝していたのである。キッシンジャーは、国王は若く経験も浅いが、スペインを一つにまとめるには適役であり、どの政党とも一線を画すことでスペインの政治を安定させているとして、困難な状況へ対処する国王を評価した[32)]。

外交に関しては、民主化後 1976 年夏、国王はヘイグ（Alexander Haig、後の国務長官）NATO 軍総司令官と避暑地のマヨルカ諸島で会見し、スペインの NATO 加盟と関連した西地中海の安全について論じていた[33]。また、1977 年のモンデール副大統領の訪西では、イスラエルとの国交樹立に関してスアレス首相のみならず国王とも意見交換が予定されていた[34]。

第二次世界大戦後、トルーマン（Harry Truman）大統領（1945～1953 年）は「スターリンの捕虜となりうる脆弱な王政」（フアン・カルロス皇太子の父）ではなく強い独裁者（フランコ）を選択した（Anson 1994: 231–232）が、30 年後米国は、民主化を推進するフアン・カルロス皇太子（国王）を援助した。すなわち米国は、歴史・政治・社会背景の相違により分裂したスペインを「和解」させるには、君主制が最も適した選択肢と考え、国王支持を内外に明示しようとしたのである。

1976 年国王はプラドを特使としてキッシンジャーへ派遣し、次期共和党政権における「キーパーソン」の紹介を求めていた[35]。同年末には、国王はキッシンジャーを「友人」と認めるに至った程である[36]。フアン・カルロス国王は、もはや「脆弱な」国王ではなかった。スタブラー大使による欧州諸国・フランコ反体制派からの情報収集、国王から得た情報の詳細な報告、米国議員へのスペイン民主化進展度のアピール、国王のスピーチ添削・助言に加え、米国のスペイン民主化支援は国王のイニシアティブによって一層効力を発揮したと言える。

V. カーター政権に残された課題：NATO 加盟とスペイン軍の近代化及び PCE 合法化

こうしてフアン・カルロス支援を明確にしたフォード共和党政権の対スペイン政策は、1977 年 1 月の政権交代後民主党のカーター（Jimmy Carter）大統領に引き継がれた。残されたスペインの課題としては、① NATO 加盟と軍の近代化、および② PCE の合法化であった。

第一の課題に関しては、フランコ死後も基地使用権を維持することを望んだ米国は、NATO 加盟に反対する左派政権成立前の加盟を急いだ。フランコ自身は軍事クーデターで権力の座に着いたが、スペイン軍は内戦終了後文民化していた。ラテンアメリカの権威主義体制と比較すると、スペインの場合は軍隊自体が弾圧行為に直接関与しなかった。すなわち、治安関係の仕事は、内務省指揮下の治安警備隊によって担われていたのである（シュミッター・オドンネル　1986:82–90）。更に隣国ポルトガルでは軍部が政治に介入し、国力を消耗させる植民地独立戦争を継続させたのに比べても、スペイン軍は非政治的であった（Lemus 2001:96–100）。こうしてフランコは、総予算の中に占める軍事予算の比率を低下させ（1953 年 30% から 1973 年 13%）軍隊を縮小していたのである（若松　1984:65）。

米国の国防情報局は、スペイン軍部のフランコと同年代の老将軍らが地中海方面防衛を重視するのに対し、海外経験を有する若年層はスペイン軍の装備近代化、欧州水準への引き上げなどを懸案事項としていると見た。また国王は後者とは士官学校の時代の同僚であり、軍部の保守派層および若年層双方に対しバランスよく接していると分析した[37]。国

王は、民主化過程でのスペイン軍近代化の最大の障害を老将軍とする一方、「緑の行進」の際名誉ある撤退を行ったスペイン軍に対し、NATO のような新しい活躍の舞台を与える必要性を実感していた[38)]。すなわち国王は、最終的には陸海空軍の三省を国防省として統一することを念頭に置きつつ、軍の「名誉」についての配慮も怠らなかったのである。米西協定交渉を行い国王の信頼も厚かったグティエレス（Manuel Gutiérrez Mellado）将軍が総選挙後 1977 年 7 月、第一副首相兼国防相に任命された。就任時彼は、三省統合により NATO 諸国に類似のシステムがスペインに誕生したと述べた[39)]。

最終的に PSOE 政権成立の数か月前、1982 年 5 月にスペインの NATO 加盟が可能となった。国王はスペイン軍の統帥権を有し、その象徴性が軍部に与える影響を熟知していた。国王と軍部とのコンタクトが、スムーズな民主化成功への一つの鍵であったといえる。

第二に、キッシンジャー国務長官の最大関心事は、スペインが総選挙前に PCE を合法化するか否かであった。1974 年のポルトガル革命で共産党に支持された軍部が勝利し、キッシンジャーは共産主義勢力拡大への懸念を一層強めていた。駐ポルトガル米国大使によれば、キッシンジャーは社会党も共産党も同様に見なし、イベリア半島の政治には不案内であったという[40)]。また、キッシンジャーは PCE の合法化の最大の障害はスペイン軍部の反対とし、1977 年の総選挙開催では民主化が急激過ぎると見ていた[41)]。

ただし、ユーロコミュニズムを信奉するカリーリョ（Santiago Carrillo）書記長の率いる PCE は、ポルトガルや他の東側諸国の共産党

とは明白に異なっていた。書記長は、「ソ連がチェコスロバキアに駐留する間は、米軍もスペインに駐留可能」とし、冷戦が存在する限りとの留保付きながらも米軍の駐留を容認していた[42)]。またフランコの死去以前に、「PCE のリーダー」は米側と接触を試み、「自分は（ポルトガル共産党の）クナルとは異なる」と主張していたのである[43)]。また PCE は、民主化の波に乗り遅れぬよう総選挙前の合法化を目指し、右派の一部や王党派とも結び民主評議会（Junta Democrática）を結成した。米国側でも CIA は、PCE が合法化されても逆に民主主義の原則に拘束され、その政治活動は制限されると見ていた[44)]。

一方で、フアン・カルロスは前述のミーニーとの接触の他にも、皇太子時代からルーマニアのチャウシェスク（Nicolae Ceauşescu）大統領（ルーマニア共産党書記長）に対し、特使を派遣し PCE とコンタクトを取るなど[45)]、非合法勢力との対話も行っていた。それはスタブラー大使を通じ米国へ逐一報告された。1976 年 12 月、辞任直前のキッシンジャー国務長官に対し、特使プラドは「共産党が政治プロセスに公然と加わることは決して認めない」という国王のメッセージを伝えていた[46)]。ただし実際には、フアン・カルロスは国王となった暁には他の政党と同様 PCE も合法化する意図を有しており、PCE 側からも合法化されれば王政を認めるとの内諾を得ていたのである（Vilallonga 1993:105–108, 124）。

大統領府とは異なり、欧州勤務の長いスタブラー大使は個人的には、共産党の総選挙前の合法化に賛同していた[47)]。最終的にスアレス首相は、総選挙二カ月前の 1977 年 4 月イースター休暇中に PCE の合法化を発表した。新聞は休刊日であり、多くの閣僚はマドリッドを離れていた。

海軍相は辞表を提出したものの、都市部では大きな暴動もなく、合法化はスペイン国民に受け入れられた。こうして、PCE も参加する普通選挙が可能になったのである。

終わりに

内戦後、フランコ政権にとっては対外的な認知を得ることが喫緊の課題であったが、長期的にはスペインにとっては分裂した国内の和解が必要であった。フアン・カルロス皇太子は、その地位が憲法に明文化される 1978 年以前に米国各方面に接近し支援を得、軍の近代化および PCE の合法化という難題に対処し、スペインにおける民主化および国内の和解をスムーズに進行させたと言える。

国内での自由な発言が制限されていたフアン・カルロスは、米国のマスコミを通じ意見を述べ、米国の世論を味方につけ、国内世論の支持を取り付けたのである。さらに、米国議員・ミーニーら有力者との接触、特使派遣、非公式会談の実施を通じ、米国に自らをアピールした。

米国側は 1969 年フランコが皇太子を後継者に指名後も、皇太子への支持姿勢を明確には打ち出さなかった。しかし、1975 年スタブラー大使のスペインへの赴任およびその直後のフォード大統領訪西後、米国政府は方針を転換した。大使は、皇太子（国王）との意見交換を含む詳細なスペインの内政報告、政策提言によって、キッシンジャー国務長官を親国王派に変えたのである。そして米国は、米西条約批准、国王の公式訪問といった具体策により、スペインの民主化を支援し、最終的にはキッシンジャーと国王は友情関係を結ぶに至った。米国の支援を得た国王

は、二つのスペインをまとめるべく民主化へ邁進したのである。

略号一覧

AAD: Access to Archival Databases, National Archives（United States）（aad.archives.gov/ アクセス 2009/9/1）.

DDRS: Declassified Documents Reference System（www.gale.cengage.com/ アクセス 2009/9/1）.

DNSA: Digital National Security Archive（http://nsarchive.chadwyck.com/ アクセス 2009/9/1）.

DoS: Department of State

FNFF: Fundación Nacional Francisco Franco

GFL: Gerald Ford Library

GMMA: George Meany Memorial Archives（International Affairs Dept, Country Files, 1969–1981）.

NACP: National Archive at College Park

NSA: National Security Adviser

PCF-EC: Presidential Country Files for Europe and Canada

SoS: Secretary of State

USEM: U.S. Embassy in Madrid

WH: White House

参考文献

シュミッター／オドンネル. 1986.『民主化の比較政治学：権威主義支配以後の政治世界』未来社

関哲行、立石博高、中塚次郎編. 2008.『世界歴史大系　スペイン史 2：近現代・地域からの視座』、山川出版社

若松隆. 1984.「過渡期の政治（II）：体制移行の諸問題」（『法学新報』、94 巻 11・12 号）、39–66 ページ

Anson, Luis María. 1994. *Don Juan*（Barcelona: Plaza & Janés）.

Areilza, José María de. 1984. *Memorias exteriores 1947–1964*（Barcelona: Planeta）.

Hosoda, Haruko. 2005. *La política exterior de la administración Ford hacia España durante la*

Transición（*1973–1977*), Tesis Doctoral, Universidad Complutense de Madrid.

Lemus, Encarnación. 2001. *En Hamelin…La Transición Española más allá de la Frontera*（Oviedo: Septem ediciones).

McCloskey, Robert. J. 1990. "The 1976 Treaty: Overview of the Negotiations," in John W. McDonald Jr. and Diane B. Bendahmane（eds.), *U.S. Bases Overseas: Negotiations with Spain, Greece, and the Philippines*（Boulder: Westview Press), pp.16–21.

Ortí Bordás, José Miguel. 2005. *La Transición desde dentro*（Barcelona: Planeta).

Pell, Claiborne. 1976. *Portugal*（*Including the Azores*）*and Spain in Search of New Directions. A Report by Senator Claiborne Pell to the Committee on Foreign Relations, United States Senate*（Washington, D.C.: U.S.G.P.O.).

Powell, Charles. 2007. "Henry Kissinger y España, de la dictadura a la democracia（1969–1977)," *Historia y Política*, 17, enero-junio, pp.223–251.

Preston, Paul. 2003. *Juan Carlos: El Rey de un pueblo*（Barcelona: Plaza & Janés).

Sartorius, Nicolas, y Sabio, Alberto. 2007. *El final de la dictadura: La conquista de la democracia en España noviembre de 1975–junio de 1977*（Madrid: Temas de Hoy).

Vilallonga, José Luis de. 1993. *El Rey*（Barcelona: Plaza & Janés).

Walters, Vernon A. 2001. *The Mighty and the Meek*（London: St Ermin's Press).

注

1）　本稿は、民主化移行期のスペインに対する米フォード政権の政策を分析した博士論文（Hosoda 2005）をベースに、新規公開資料も用い、論点を国王と米国関係に焦点を絞って論じた。

2）　政府が「貿易や為替を統制し、農業では作付面積、供出量、政府買入価格を、工業では輸入する原料や機械の価格と割当量を決定」する（関・立石・中塚 2008：170)。

3）　USEM, Telegram to SoS, November 5, 1975, AAD.

4）　Embajada en Washington, Carta al Ministerio de Asuntos Exteriores, 17 de enero, 1967, núm.10039, FNFF.

5）　DoS, Memorandum of Conversation, January 26, 1971, Executive Secretariat Conference Files 1966–1972, Box 538, RG59, NACP.

6）　ウォルターズはスペイン語に堪能であり、ニクソン・フォード政権時大統領府の命により、

スペインやモロッコなどで任務を遂行した（Walters 2001:126–135）。

7） USEM, Telegram to DoS, March 22, 1976, GMMA.

8） Ambassador Wells Stabler, *Oral history interview*, Georgetown University Library, February 28, 1991; USEM, Telegram to SoS, November 10, 1975, AAD.

9） USEM, Telegram to SoS, May 28, 1975, “Spain: to Sec-NODIS（1）”, Box 12, NSA. PCF-EC, GFL; Stabler, *Oral history interview*.

10） ワシントン側の反対で実現しなかったものの、大使は 1977 年にもモンデール（Walter Mondale）副大統領の訪西時、PCE を除き PSOE を含む非合法政党との会合を提言した。

11） SoS, Telegram to USEM, May 26, 1975, folder “Spain-State Department Telegrams to SECSTATE — NODIS（1）”, Box 12, NSA. PCF-EC; NSC, Memorandum for the record, June 11, 1975, folder “NSA. Memoranda of Conversations 1973–1977”, Box 12, June 6, 1975–Ford, Kissinger, Schlesinger, Bipartisan Congressional Leadership, GFL; Stabler, *Oral history interview*.

その後も同年 11 月のフランコの葬儀および国王の戴冠式に出席したロックフェラー（Nelson Rockefeller）副大統領の訪西、1976 年の国王訪米の際にも同様の非公式会合が行われた。こうした非公式会見の実施に至る過程は、スペイン外務省の公式文書には表れない。

12） DoS, Telegram to USEM, June 19, 1975, folder “Spain: from Sec-NODIS”; USEM, Telegram to SoS, June 25, 1975, folder “Spain: to Sec-NODIS,” Box 12, NSA. PCF-EC, GFL.

13） この際、具体的な役割は明確ではないが、フォード大統領のスペイン訪問計画につき、前述のウォルターズも関与していた。DoS, Memorandum of Telephone Conversation, 1:07 p.m. and 1:10 p.m., November 4, 1975, DNSA.

14） WH, Memorandum of Conversation, November 4, 1975, folder “NSA. Memoranda of Conversations 1973–1977”, Box16, Nov.4, 1975–Ford, Kissinger, GFL.

15） USEM, Telegram to SoS, November 1, 1975, folder “Spain from Sec-Ex,” Box 12, NSA. PCF-EC, GFL.

16） DoS, Memorandum of Telephone Conversation, 12:20 p.m., November 4, 1975, DNSA.

17） 11 月 13 日の時点では、キッシンジャーの「副大統領の葬儀および新国王の宣誓式出席」提案に対し、フォード大統領自身は、彼自身の「宣誓式」出席の可能性を排除しなかった。

エア・フォース・ワン機内泊というハードスケジュールをも辞さなかったのである。最終的に代表団長を決定する際、国家安全保障会議（NSC）と国務省は閣僚を薦めたが、大統領は副大統領に決定した。WH, Memorandum for the President, n.d., folder “Funeral Delegations”, Box 5, Richard Cheney Files, GFL; WH, Memorandum of Conversation, folder “November 13, 1975 — Ford, Kissinger”, Box 16, NSA, Memoranda of Conversations 1973–77, GFL.

18）United States. Congress. Senate. Committee on Foreign Relations. 1976. *Treaty of Friendship and Cooperation with Spain. Report to Accompany Ex.E, 94–2*（Washington, D.C.: U.S.G.P.O.）, pp.2–3; McCloskey 1990:18.

19）国王の訪米直前の 4 月末、アルバート議員はスペインを訪問した。当初はスペイン国内のグラナダからマドリッド経由で出国する予定であり、僅か 1 時間ほどのトランジットであった。しかし、スタブラー大使は国王の会見希望を議員に伝え、フライトの変更やヘリコプターによる移動を提案し、会見を可能にしたのである。USEM, Telegram to U.S.Embassy in Tehran, April 21, 1976, Collection of the Hon.Carl Albert, Series Travel, Box 8, Folder 20, Carl Albert Congressional Research and Studies Center Congressional Archives; Hosoda 2005.

20）本稿の対象期間外であるが、1978 年バスク州からの移民が多数居住するアイダホ州選出の民主党のチャーチ（Frank Church）上院議員が訪西した際のエピソードがそれを実証する。1978 年当時、次期米上院外交委員会委員長であったチャーチ議員は、独立機運の高いバスク地方から訪問を開始した。これに暗黙の抗議を行い、同議員を冷遇するスペイン政府に対し、国王はスタブラー大使の依頼で急遽同議員と会見した（Stabler, *Oral history interview*）。

21）United States. Senate. 1976. *Congressional Record*. vol.122, part 5（Washington, D.C.: U.S.G.P.O.）, pp.6174–6176; Pell 1976; United States. Senate. Committee on Foreign Relations.1976. *Spanish Base Treaty: Hearings, 94th Congress 2nd Session, the Treaty of Friendship and Cooperation between the United States of America and Spain. March 3, 12 and 24, 1976*（Washington, D.C.: U.S.G.P.O）pp.20–23; pp.43–45.

22）CIA, Intelligence Memorandum: Spain: Political and Economic Picture in 1976, May 1976, folder “Ford Library Project File RAC program”, Box 6, Documents from NSA: NSC Europe, Canada, and Ocean Affairs Staff files（11/2008 opening）, GFL.

23）USEM, Telegram to SoS, June 18, 1976, folder “NSA Outside the System Chron.File”,

Box 4, Chronological File, June 1976, GFL.

24） Stabler, *Oral history interview*.

25） William Nicholson, Memorandum to Richard Cheney, April 30, 1976; Reciprocal Dinner hosted by the King and Queen of Spain, June 3, 1976, folder “CO 139: 4/1/76–5/31/76”, Box 47, White House Central Files, Subject File, GFL.

26） DoS, Memorandum of Conversation, June 3, 1976, DNSA.

27） Stanley, Letter to Alvaro De Orleans-Borbon, March 22, 1973; Stanley, Letter to Lee, July 16, 1971, GMMA.

28） フランコ政権のサンチェス＝ベーリャ駐イタリア大使は、ミーニーが60年代には社会党系の労働組合同盟（Alianza Sindical Obrera）を支援しているとし、内戦時のスペイン情勢からあたかも何も学ばなかったかのように「スペインに社会主義、自由で民主的な労働組合が創設可能だというばかげた考えを維持し資金提供を行っている」と評している。Sanchéz-Bella, Carta a Carrero Blanco, 15 de marzo, 1965, núm.1117, FNFF.

29） Lee, Memorandum to President Meany, June 1, 1976.

30） Sartorius・Sabio は、「労働組合（that is our problem in the unions）」を「欧州の問題」と訳し、国王のためにミーニーが果たした役割については不明としていた（Sartorius, Sabio 2007:581）が、別の史料により概要が明らかになった。DoS, Memorandum of Telephone Conversation, June 4, 1976, DNSA; WH, Memorandum of Conversation, June 2, 1976, folder “NSA. Memoranda of Conversations 1973–1977”, Box 19, June 2, 1976–Ford, Kissinger, Spanish King Juan Carlos, Foreign Minister Areilza, GFL.

31） George Meany, Letter to His Majesty Juan Carlos I, November 19, 1976, GMMA.

32） WH, Memorandum of Conversation, May 24, 1976; DoS, Memorandum of Conversation, December 2, 1976, DNSA.

33） “El Rey se entrevista con el comandante de las fuerzas USA en Europa,” *El País*, 14 de Agosto, 1976.

34） The Vice President, Memorandum for the President, May10, 1977, DDRS.

35） DoS, Memorandum of Conversation（Meeting with Unofficial Spanish Representative of King Juan Carlos）, December 2, 1976, DNSA.

36） USEM, Telegram to SoS, December 14, 1976, folder “Spain: to Sec-NODIS（3）,” Box 12, NSA. PCF-EC, GFL.

37） Defense Intelligence Agency, Intelligence Appraisal: Spain in Transition, April 2, 1976,

folder “Dale Van Atta Papers”, Box 15, Intelligence Documents, GFL; The Military in Spanish Politics, March 9, 1976, folder “Ford Library Project File, RAC Program”, Box 6, Documents From NSA: NSC Europe, Canada & Ocean Affairs Staff files（11/2008 opening）, GFL.

38） NSC, Memorandum for Brent Scowcroft, June 18, 1976, folder “NSA. Outside the System chron. File”, Box 4, Chronological File June 1976, GFL; アレイルサ外相は 1975 年末すでにこの懸念を国王に表明していた。WH, Memorandum of Conversation, December 16, 1975, Records of HAK, E5403, Box23, RG59, NACP; Memorandum to President Carter, Muskie, May 8, 1979, DDRS.

39） “La estructuración de la Defensa se asemeja a la de los países de la OTAN, ” *ABC*, 6 de Julio, 1977, ABC.

40） Stabler, *Oral history interview*.

41） WH, Memorandum of Conversation, May 24, 1976, DNSA.

42） U.S.Embassy in Paris, Telegram to SoS, July 11, 1975, AAD.

43） WH, Memorandum of Conversation, September 24, 1975, DNSA.

44） CIA, The Spanish Communist Party in post-Franco politics, January 1976, folder “Ford Library Project File, RAC Program”, Box 6, Documents from NSA: NSC Europe, Canada & Ocean Affairs Staff files（11/2008 opening）, GFL.

45） ルーマニア・スペイン間の国交開設に関しても話し合われた。USEM, Telegram to SoS, December 22, 1976, folder “Spain: to Sec-NODIS（3）”, Box 12, NSA. PCF-EC, GFL.

46） DoS, Memorandum of Conversation, December 2, 1976, DNSA.

47） Stabler, *Oral history interview*.